



中村俊定文庫
文庫 18
536
2



誹諧古今句鑑 秋之部

立 秋

寺町のと水ふたそゝる葛乃葉の梅着
 秋事ぬと脱されそわ物とてと肉一
 株まぬを又て魚りくると魚の庄宗
 や片一とれ垣切晴むすけされ秋治裁
 と羽秋とまて門掃くととと外存義
 秋と川や果向小舟の影強義崔舟



換投子桐の葉落よ夕侍れ秋玉圃
そとせし公や好くるを桐の旗木丹
夕々秋乃びと川舟とるおもひが左藤

初秋

夕月や祝あやとけさ乃つ也保友
文月や陰を感ゆる故屋れ内其角
夕々月やひととよハけしきむすめの子
秋凡乃うろろこねぬ繩もと礼嵐雪

初秋や四つ色をり乃月の足寥和
夕の秋の狂ひくくや懈れ振米鳳
初秋や筏く麻と秋人の顔蒼狐
暮ろろや風をなごても神乃秋栗堂
はつ秋やあしは潜まる風の筋梅邦
初秋や暮吹あむし竹乃新弘舟
夕夕秋や蚊もふもそと紙一二ふく存
初秋や思る日小沈む蝶のうゑ素人
萩小虫秋のけしき夕志月くしき吟松

一葉桐柳

風まよきまよと桐の一葉は
 望一
 湯よりふ見えや一葉は
 岩
 なつちをいものう風の柳ちる
 免いせ
 ひとをまよくちるや柳は髪と
 心
 泉あの色はせし桐はとも
 春
 一葉を柳や光と見えし
 凍山
 満一さの工はけめや夜やま
 頃
 百柳ちるとも風はゆるぬとも
 婆
 百

あはれくや桐の一葉に人ころ 軽舟

初月

千秋の楽しといまふ之日此月 巨海
 天乃戸のそかきものうよこの月 光
 秋もまき二日月あや 掌は松 支
 象の眼やまをゆき三日の月 専吟
 初風や月の撲きし三日の月 吳仙
 を清月やまき細月の秋の空 玉圃

二月月ふ又く主月の姿が宝馬
勢多ぬねの風ちり初月夜五種

七夕

似もの女夫ふちるや二つ星貞徳
夕の雨ふるハききくを如夫星風虎
大切を夜を明ふ多電あまの河其角
はひ事代振の七葉やひ智子貞佐
秋もまた七夕のあれ明やまー猿維

肌ききけり免や早れりしをさし由
七夕やくふもくさぬあもあろく急士
早合もゆるさぬ鶴の言者く系桂坊
夏よりり夜もあるすりて浪河蒼狐
虚片す小蕪して吞き浪加賀涼
月ハ山小吹けは新や星の意加賀涼
月落く西よまな一あき此河雅郎
志めやう家早るのあ風やかし小神公曳
敷くの孫の糸や妹々琴純亮
再かすぬ月を片たをまあまの河一巴

今宵静く福も身に在りて
世小深まぬ尼の影の糸白く
うらみも人間あり是れ言
水子のみして今宵や阿戸此川
糸心くは身を待たぬ女帝
と〜ぬもも徳さハ振袖号こ〜
言琴や心向ふ浮ハ想夫戀
津富

寄井星恋

鎌倉や早も山ゆ〜此乃井乃公曳

六日之吟

又月や六日も乃のあまハ似以芭蕉
首尾若よ早の六日此乃乃高柳童

聖霊祭

生て飛くいつきも世心冥まつる
まよ〜くと在すの如〜冥祭季吟
冥柳や皆去はく〜と若子阿〜嵐雪
幸かまきと若子ハ糖を冥戸つ上
〜ま〜ハ我命る乃玉ま信利心祇

以山不來まて候一たま糸心祇
果菓あ不押合多人灵平片くど 蒼孤
とる世也帯くこれ若の長短也有
灵棚や石片ふくは佛あ孝平砂
霊棚の蓮の紫凡や紙表包、
此くは火や此とるいまく灯籠坊、
在す物く舞末を事そ玉糸宝馬
余さ又うたかたを古き玉まつ至 津富
懶約て俺一小家此灵も片り、
灵棚や服よいさやふもくねとも 雀舟

水くさ記もの海や玉は片利不言
土釜よ碎けておちの多き糸 笠袂
灵棚や何くいろりの亭之とる、

繻獨

踊

公宴小あゝぬや余の漕上勢 風虎
一也り待人まきととるのれ 尚白
ととる子や糸女路の多いろ 蓮之

曙る花や恋もさる所の抱子も
亀文
かりぬや小町ととりつ 付も 其葉
秋来ぬと眼も耳もそ 踊るを 樓川
うさぬもかさし扇やきき 記 遠波

燈籠

冥途やうらた寺の揚灯籠 京 維舟
言燈籠昼も物うきけらら引 千那
高灯籠基却地まはなりり 夕里 貞佐

高灯籠指の秋のまじり 梵花 蓮之
昼はくく 灯籠のゆきも秋の風 春來
燈籠の先 鈴の如き 月夜 律富
言系の花 籠やけり方寺より 運
うらた也 遠小所の高燈籠 不言
灯籠やまじりく小文て 軒涼し 貫太
燈籠のやまじり 灯籠小節の如し 花籃
燈籠のほのく 妹のまじり 五種
目と恋のれ小女小
娘いれ者目をまじりて 初灯籠 百萬

祀火

也中への律委不見ゆる祀火が
こまきせて祀も紅葉もむ火が
咲ちらハちるとはけ見のちちが
言くと物つゝ祀の玉火のち
蒼孤 春邦 左簾 操舟

あさうか

祀ふよがしのさそそ火くき才營

秋七

何さあ不也夜を明きるくーそのあ
朝風やそ日く月の花の出
暮の志不めりや日と見あけ
胡邪やいもの蔓くろニニア
あはる序やうも照つま月のみ
朝うかやゆきとめす風乃香
阿さうほの瑞穂やふ咲く
朝風や何のささうて花ふ
朝らほやかくくくと花の敷
朝風や咲け花う実乃多き

史邦 杉風 秀朝 沾津 曲菴 心祇 蒼孤 石徐 佐保丸 嘉作

新のほやおとすおの情氣を
柳島和月夜といとむ花乃道
あさくふはほめく忍びる人の息
葦や父アは露とくささる
新島や染くればひさし
柳娘や妹の垣根の志とけなは
何事このほや蒼ハちきおれけし絶
葦小島くぬまをきりし
あさくふや露といと柳く是
柳島をぬくもきれば後嘆まふ
亭
春
存
義
高
空
稚
言
仙
里
木
丹

半生花の花の命や胡くもは
何さくふは月一昔も陰ひき
帷
月

暮下きり子れかきく
也
芭
蕉

木 槿

槿花一つ川と洞める夕ア
乃さの木槿ハ馬小喰き
大坂
空
存
芭
蕉

蘭

蘭の香や及そぬ人へ運うる心
物あまハ接きふニカハ葉花宝馬
葉極く馬鬃也もかうか木丹

画賛

葉花也一回ふりたる 句よ 宮不言

蕨

古傳亦の瓦落てや之れ 蕨宗瑞
初風へ吹まうれつ蕨の世 葦之
ちる蕨とあはしと枝のうねり代 玉團

女部花

玉よりくも花あけや女部花 芭蕉
口ゆきく笑さぬむやとくふ人し 超彼
伯宗のあぬも悟し女部む 心近
いうちれをゆきと男とくねし 蒼孤

我々も少くも作けて女帝一花涼城
吹かす心の多しとくふしし
女帝の夢やえの
家ものふもれし淋し女帝花
朔風や花れしとくふしし
其礼

桔 枝

あきくふの朔ま行れぬ桔枝うか
まらかしの花まらけしや
貞知
卒砂

秋海棠

秋海棠西瓜のふもれしとくふしし
朔なく秋海棠花とけしとくふしし
芭蕉
和莉

鶉 瓦

鶉瓦や夕日の裾とけしとくふしし
一寸
芦英

瓢

瓢箪や家と極め乃生れ竹吐風

三界唯一心

百生りや夢一節の片々ぬきと 千代尼

蓮寧花

蓮の葉や花ても口ー他の才尺 卅

蓮乃実ハ皆らもちる花く危か芦か本

釈迦如来

蓮の實ハ花と奉りよ阿爺外旧室

蕃椒

そり子木もまみらーふ危重うー椒菴

まくてもそりまものそとるかし

一畝人せうーやたううし

もまどうにほせる秋やをしし 六志 三秋

西山

西山ふたつを安達る系ちれや
其角
渾沌の書や西山の月利ふ
山蟻

残暑

秋もまゝに暑居りしれ
暑のれ
乙由
桐の葉も中く落ぬあつさ
如竹
はし籍のちつら
残暑
帯
珠

虫干の残る暑さや
漢乃
海風舎

秋蟬

蟬啼や七月末の節
李作京 麗人
日ららば日暮るま
如竹
五朝
入相とたたくくぼくし
秋を
百萬
日ららば日暮るま
如竹
五朝
とらき日七葉ふを
秋の埜
白
龜

蜻蛉

遠山や蜻蛉はいゆきついでるよ秋の坊
蜻蛉の巻とけゆる西日のなほ荷
せんほうや花あきたもとの枝超波
蜻蛉や花あきたもとの枝超波
えんなくも花あきたもとの枝超波
暑き日の今さあ隙也赤蜻蛉
さしとてき隙ぬ日和也赤蜻蛉
とんぼもやつと節ふる間も若
律富

虫

十のり飼てあそびけ虫の夢貞室
行ぬの捨ふな記むしのうゑ鬼貫
盆道て雲周くく出乃声か世城
その虫細い虫と啼にかり万子
けふも日ませふ成ぬ虫の了忽来山
虫まきくや突くもあ社の下を去超波
雨晴くまむや月産れ虫の勢梅寿

まろくおまのき肥ぬ荒をけ
月の奥も蟻さけけり生の声
胡蝶の玉と移るんじし色
今又不同悟じ夜や去り夢
花のあけ竹かき切分裏り

虫撰

花言れ撰後さけけり出のゝ急
貞室

蚕

ま心月也餅とささるるさるさ
年高れと静もかきを静也
屋汁桶の糸やささりさり
赤貝さささささささささ
辰月品も物入れてけり
曉や灰の中ささりささり
けりおささ石ささてささ
嵐さけあのおさささささ
草ささや草の内おささ
只ささりささりささささ

角 月 北 水 因 淡 ちよ 狐 捕 丹

扇園扇立

凡の君ハ忘れ並まぬ扇可大坂な三政
扇立メアとちれな待也吐風
子訓しも仇られ誰が控巻扇伯幹

扇立メアとちれな待也吐風

等也栗扇も立一子乃暇益秘

編妻

編つるや羽と打心細乃暮立圃
いり序まや扇てゆささの鬘世髪素狄
編妻了了懐さぬ借のやとり外不角
編はまや扇の鏡了物かけむ氷花
いり序了や被治の浴きつの外春来
いり序了や被治の浴きつの外春来
編妻也研りて許の物あされ田社
いり序了や被治の浴きつの外春来
編妻也合系はりし雲の社北来道
いり序了や被治の浴きつの外春来吐鳳

稲妻の影や驚く川のいろ 井
いさくまや文字を扇踏まてよ 曳尾
いざ僕尸や十は坂本の人衆と 左
稲妻や建りても破き障子 一
いさくまやかごとと心はくそ 山
稲妻やちくそと池の水 融
秋もまゝ稲妻よと夕ア外 花
稲妻や何れも記謝りくけ 存
いざ僕まに歌子と花 光
いざくまや古杉煙の雪の色 仙
里

稲妻やどろりと思ふ寸頃の 五
沖の帆小武庫の稲妻うつり危 一
稲妻の裾やほろく風の蘇 笠
いざくまやふとえて泣きし 濡 佛 玉
稲妻や月入法の雲と 裂 百 桂
いざくまや禿ふりまてくれと 妙 方
或智識の志めし 糸
稲妻小悟くぬ人の 音 比 上 芭 蕉
如是我聞
稲妻や二夜めふくる 丸 木 橋 白 袂

稲

早稲の香も素湯ふ吹こぼ朔朗涼
満くて畔ニゆる稲の穂波が素山
ア海波静くも稲の葉入る面寛之
穂既冬垂きあり夕日新雀舟

麻酔言鳥驚

新~~~~く惹せてもまよのかしけ左簾

飯初の凍汁也る木と~~~~律宜
田舎よも佃工人のま鳥おと~~~~玉圃
雨風~~~~志々まま~~~~か~~~~が素登

露

白露は雪ふりなれままと~~~~梅露
きく露や浮世一糸五重ほと~~~~柳前
胡弓や指ふささするうはの山蕭山
白露やおもよて淋く~~~~て茶蒼孤

満ち時為てえさや州の病
 胡ハ目小生珠きし緒此病
 使晴のそ急して涼し病の玉
 去る病や何は二片ても州乃系
 何し病の病小病の心な
 白病や起初ハ行妹の庭
 胡あや人の穢嫌の玉
 虫の毒と盛何げて龜州の病
 病の病病病形り小又病病
 及病や病病病病病病
 宝馬

障るハ常昇ると病の力うか
 思案して病をこねれり州の病
 病の病病病病病病病病
 白病や病病病病病病病病
 平破

霧

胡霧や川とささる
 女月あふかされぬものを
 晴て行方此病病病病病
 乃翁

箱根

鶴啼て里試告れや秀北海 蒼狐
川秀やあつし進けり馬乃息 北平
勢了夜の明らけり林原外
秀と海の遠方漕行小舟外 宝馬
既まりや地味ゆく言れ嘆き

相撲

部をを任すしと危 角力 元 本 来
上手かと名も優劣也 角力 元 其 角

角力元並ふや秋のうら 嶺 嵐 雪
憎けあおる男を勝し角力元 材 撞
負角力名のるものかといふ 心 芳
論言ハ汗乃ちや相撲 取 心 抵
陽物よりて静なりとまま 花 雪
後角抵元もあられぬ花を 吳 夕
関角力人間是をよむあ 公 曳
子と抱く行司小ま川口比 存 義
夜角力やあつ方あつ勝せ 李 克
引ふれお撲や時のむも 左 簾

子と外弱と強と脊負投蛙色
夜角力や元角力此角力か
遠余は小抱角力此角力か
大物も大國とて其角力
天地に心と運ふとまはら
花

八朔 八朔梅

八朔や我理ふ我出す梅
香也秋も今霜俄に園の梅
羅人

八朔や元角力一扇おもひ出
左

鶉

一羽ハ何まり尾もさき鶉
羽貞徳
此竹を洛外とすけり鶉
仙法
粟の穂と又上る時や啼
交考
かいまゝも麻糸の鶉
琴風
迷懐と啼りハ鶉の尻
蒼狐
夢や花の千々情晴と
朝鶉
花雪

色ともし小ぢらるる手紙の勢が花
初声もたもひ切るる勢うか
今起しこゑと笑ぬうらうが
雀郎

美鳥 小きば

己の名の口しうしうとや
むし勢の風うらむる縄よが
静鈴よまひと川流く水の止
川せもや冨尖る岩の角
梅壽

むくきの雲と群行メアが
久きれり初と虹の橋
並松やそり小き我秋乃久
市仙

雁

足跡や平砂の厚乃あらしり
酒笑小ゆくは雨夜の厚ひと
厚芽て又一鳥入るは
湯舟小灯や厚れつき
貞佐
書 正 重
其 角
雨 桐

油灯小天井借し雨夜の厚 春来
 浦越てまゝ千ぬおやなされ 佐保九
 初厚中並つてあぐハ情以事 千代尼
 水糸や声込小厚れなおもひ 栗堂
 厚味やあろろ情 映む時 貞知
 湖や一眼小小田と芦の 厚 龍昇
 厂つゝ心も秋小定まぬ 素竹
 親子おとまきさゆるもちる 厂の声 吐風
 初厂やささくほのふとら 妙を 曳尾
 雁啼や響て情こもあまの 川 津富

夕夜ぬ色つちさくや泣の 厚 雀舟
 圃初く見ゆる厚や刈田 面 百挂
 厚啼や涙物ふま川 京たより 太布
 厚小酒初くく厚をば夜かな 技詩

木 巻

木巻やおもひ切され昼の面 芥境
 木巻よ其向をくも秋のくれ 花菱
 木巻よ其向をくも秋のくれ 花菱

木危ハ鳥の嫌ハ小烟ヒ色ヒ 龜 素玉

鹿

むいと啼尻ヒ色ヒかナ一ツ夜ノのノ麻ノ ちせヒ綫
草ノのノ山ノまキまキとト麻ノのノすシとトがガ 耳ノ角ノ
啼ノ麻ノとト狛ノのノ末ノ方ノ小ノ足ノかナとト 去ノ来ノ
遊ノ上ノてト尻ノ上ノ小ノ竹ノくクびビ麻ノ此ノ声ノ 北ノ枝ノ
麻ノのノ喜ノふフくクのノ顔ノえエるルメノアノ式ノ 一ノ髪ノ
啼ノよヨとトもモ可クもモ一ツ麻ノのノ腫ノつツ時ノ 直ノ水ノ

麻ノのノ色ノ心ノくク角ノハノかナりノとト 夕ノりノ 由ノ
鹿ノノノ尾ノやヤ巾ノのノ淋ノきキしシろノ向ノ 古ノ立ノ志ノ
麻ノのノ喜ノやヤ麻ノ多ノ也ノ一ツ夜ノとトあノ之ノ夜ノ 百ノ洲ノ
八ノ月ノ小ノ麻ノハノあノよヨびビくク姿ノ 何ノアノ 馬ノ光ノ
游ノハノ耳ノのノ外ノ小ノ落ノりリ麻ノのノ声ノ 千ノ代ノ尼ノ
何ノとトくクとト夜ノ乃ノもモもモちチやヤ麻ノのノ声ノ 蒼ノ狐ノ
月ノノノ連ノれレてト從ノ昇ノるル声ノやヤ痺ノれレ麻ノ 龜ノ文ノ
夜ノ危ノ小ノまマまマあノとトやヤ麻ノのノ聲ノ 春ノ邦ノ
奥ノ山ノのノ折ノくク其ノまマゆユるル一ツりリ此ノ二ノ玉ノ
半ノ足ノとトぬヌ女ノ麻ノのノ面ノやヤ面ノのノ音ノ 玉ノ圍ノ

小窓ハ寒けとと〜麻のこゑ乙外
眼小えゆるものより言れ麻の声、
人馴〜麻さ〜素衣の夕ア外 素月

新 酒 疎 疎 疎

我も〜新酒ハ人のさうやとき 嵐雪
酔く〜して君子の味の秋酒が 吳夕
〜留なき〜秋の〜以ものゑ濁ア酒 葵夕太

秋 風

秋風の口古似き戸萩乃 喜 季吟
何く〜と日冬はまきくも秋の風 芭蕉
蝶風の吹く〜り竜人れ 老 おまつら
十童子も小粒小なれ戸萩乃風 許六
ちう〜ちう麻刈萩のあま〜風 越人
かつ〜りとかけ初る菌や絲乃風 杉風
てせ紙を々何ま〜れと秋のこせ 古 踏通
後あてや背ふか〜と行萩のこせ 専吟

秋風や秋風髪乃持るし 新 雅 郊

西中野寺にて

西風や何そ自力の扇 古 達 梅 翁

悼

塚も動け我泣き急ぎ坂の風 芭 蕉

野 分

此方して鹽小雨とききく夜うま 芭 蕉

小承女や世ふり向ふかえ 古 園 女

神も亦そ人の勢あり地ふか 羅 人
むつゝく 花山や世ふれ 夕 居 棠 堂
草ハ皆常むろとけの野 久 外 仙 貝

花 野 草 花

あろりの百姓馬や花 野 系 公 夷
志く小へ日紅 残るそり 野 外 杜 谷
下郭を拙く破ハぬむゆの 花 乙 雉
南よよ露もまじり 干ぬ 草 花 素 推

西賛

秋の地や小町の掃首元ちりり

蒼孤

宇治花園

花をや今もむくく此物さへも 七 架

芭蕉

いほくぬ雪のまを成り月夜 三 信

舟と帆となり風を成り 一 晶

衣と紫や老く小町やま 衣 雀 郎

もる月ハ芭蕉と破れ 白 双 掛 群 長

芭蕉 尾花

にやろさ急ふわ又えぬ 芭蕉 北 鬼 貫

暁我中の林を括る 芭蕉 の か 嵐 雪

八月の降るを動くむく 芭蕉 不 角

せぼしのたまさき道や花をく 芭蕉 春 郊

むく中や月乃樂屋の花 芭蕉 涼 山

吹く吹く風の谷何と 芭蕉 水

そよくと夕日何ら尾をけ
るや花乃徒ひて危いと
積子出ておと和らるる
積子 宝馬
ト人

牧ある方小旗なり

芒の穂

芦の穂戸ふやちと鳴よハ
芦れ穂戸糸掛上れ夢ろろ
嵐雪
文州

莢花

いらくと強る暑くや莢の
大莢乃穂小出れ戸荒ふ
宝言

莢麦花 新莢麦

肌ききけし免ふ赤し
新莢麦や太刀も刀も
惟好
春来

うゆくとうるこて白く苔麦花 蒼孤

禪悦して

新花はや物とよむるそ一物旧室

草

夏てかりし松茸やう山の 腰 重隆

くちやうや松の支ぬの 一粟 潤泉

松茸や去るぬ木の葉はるくり付 芭 莖

初とけりまきこりぬ秋の 初 一

茸抄や鼻の先ふるふか 三角

松茸や都小ちう記山の形 杖 統

初茸や一つ小麩ひとけり 水 国

茸抄や所ふるある人の妻 石 絲

茸うりや茸ふるもあちをぬま 組 鹿

松茸や計にむひし磯洲より 吐 風

花も笑うて木の子とむるを移し 羽 貫

茸抄や旅ありあはれ越ぬ山 挑 水

月を習ふ盛久ハ誰き茸抄 津 富

梅嫌

残る葉も梅の枝にまじりて
梅もど紀月も葉も花も
白く月も八つやなき梅も
玉春未圃

放生會

魚も夢の如くハ笑ひて放生會
静けりても捨なきを放生會
羅人

月

皆人の昼寐の種也秋の月貞徳
月戸の如く我乃二つや新法作
いさく花も今春は月一輪梅翁
周を急よ今春文ゆく次六の月貞室
大さの月ともめて一七十一二
月や人の心とわたりて 美 丘 伏見 任 口
十日のより三日月あき今春は 京 同 加 方

朝ハ花ハ見ぬ里も何り々々代月 西雀
 父老を酒の母が更けふの月、
 秋もも折月我鳥ハいつも啼 鬼貫
 月ハけを暮ふをれて何ひと川、
 月いろや昔のを手はく乃浦、
 をおく人と休むる月見 芭蕉
 月子一折ハるを折れり、
 あの中ハ露結かきさし宿の月、
 月々暮高懐き暑ささし来ぬ 沾徳
 更やうと見定れ夜ハ夕の月、

雲愕や室少そむと月ノ客 春来
 名月や海も思ひ山も思ひ、
 うま色ぬころや月ノ十三夜 素堂
 名月や舟の上へ松乃 新 其角
 名月や居酒のまむと熱うあり、
 考うれて猿の齒白し峯の月、
 名月や耳の山風眼のくもを 来山
 を侍きの氣皆うつれ月をけ 支考
 山寺ハ弟搦ふと此月夜我 越人
 とき福小吐てゆる月夜の子 一發

仕合な岨乃松うれふ此月嵐雪
 名月や窓伸上れ小松系午竿
 流唐せく入る月小系世一細雨
 名月や礎うちこむ浪乃隈後雪
 臥て保る山と晒そやふ此月乙由
 妻ハ山梅の笑以や帯ぬの月六く唐
 二日月の推親あり十三夜葦之
 名月や丸木げらの床安き柳居
 名月や親ハ帯白乃人通己窓和
 ちとハあをふしの月又望れ月、

名月やうつうー海の浪屏風春来
 名月や雲ハ茶本とかくまの心粧
 虫懐小供ておとさむ秋の月、
 いさむいや月の桂乃散とく怨、
 名月や風はくええて花すき希因
 名月や外外の月出るころ外遊人
 何れに空が月乃北忍て七、
 いちをいや妻と喜ふ日一客、
 刈て後とくを田毎代月己外掛坊

名月や晴て夜ハ萩のあはれしり 雅 郊
 鳥啼夜のそりやふしの月 寛 廉
 月今宵旅燭を空もくし 素 廉
 名月やうられさるる松のあ 吐 鳳
 名月わかきとかりし月夜に 曳 尾
 月見とや月見ぬ人此舞うと云 北 平
 城子村ぬぬ月子秘ぬ夜と成る危 沾 莪
 名月や寐らるるの鳥 羽 乃 陸
 舟とけし 萩半や砥石の月 吳 言
 犬と麻猫と恋やまよふ月 存 義

いちよひやまけしハ晴るさよの月 左 簾
 夜文人志のまろく存の月次し 宍 郎
 物にもよ月をあらしむる月 何 来
 箱刈て手足伸とや門の月 一
 新しや月の今宵の竹に露 素 南
 名月や古き詩歌ハ胸の香 平 砂
 古川小水の流るるや存の月 一
 名月やこころい思ふと眼のかをみ 素 芳
 月満りや香を人こころく心 素 人
 露の白き刈田の茎や後の月 一

名月や扇拾ひ一待りも言
名月やおらぬ氷ゆぬゆふ
昔はけし尾花や存の月空に
月小あこ一枝おしむ来たり
これひとと月れち去し
米蒔うハ鳥もとりまじ月こ
うろゆくら山々の夏や三保の月
夜ハ秋也名月小戸と叩く
名月やかこら歌ふる露色は
名小言り月小秋や夕化粧
聲我

月出て薄とりのぬ料り系花跡
鶴頭もまき小よるや存の月
いささけや片隅あき床けら雀毎
十み夜小出一月も十三夜百菴

十四夜

望満ておまかけの月のふらふら
月とあそく月と待くしあそび
鬼貫
平砂

中秋之月

何のまといえてる今宵かおふら
見えより一輪妻不ともく人の月
美塔

関羽賛

備うら積毛穂小出て秋乃月 曰室

十三夜

前小勝川糸乃足比長月や 羅人

羈旅

今下るり月さる小夜のさね 山素井

長月半の夜月ハ思さる俄アカ守るふ

しるるや糸さうかけて月も暈 何来

階裏の侍九列一越とそまきし小

松寄も持人や世と猿の月 呈秋

礎

伝きく程あうよまき奥 坐友凉菴

拍子木乃徒城外や小 庚礎柝居

床よの静あまなくの 礎子 挂坊

幄あまて松ある宿れまぬ古 引古 紀逸

浪し浪観小寄くさぬ子 引古 蒼孤

初夜の風後萩乃小るや 礎 貞加

一床是二松さうして 礎 雀邸

月しろや衣ふりさるるれ 津室
秋ふけて都も夜くれ 露 水
糸のこゝろ寐ぬとわくときまのこ 沾 涼

あふも名のりもそ

中の間小森ぬ子美人小枝 磁 其 角

る別

香さハ磁びー々 猿ころも 柳 居

菊

黄菊ささきくそ外の名ハくもが 嵐 雪
山路の葉跡菊も又遠以多り 越 人
糸ものも菊にちるん 類 徳 野 坡
上手出て滅きくなら菊のそれ 青 我
長き蝶くとも進き久らを ^{尾張} 木 児
蛇の来く梅の香あり 葉 花 涼 傭
菊ハ黄ふさの飾ぬ白ひけ 蒼 孤
かくれぬや菊も持て咲起る咲 葉 水
大輪小香と手くえると雨の菊 栗 堂
ういろひー菊小夕日や市向ひ 貞 知

ちり菊や月ふかくれぬ花の父 龜文
 我虫の好くハ合際在葉作り
 其造作不百姓の菊 笑子くり 龍昇
 合茎の露よ黄 菊 乃 掌 公 曳
 空あどおほさぬ菊の行 幾が
 白葉く露の風情そやこころに 一 巴
 ちり菊や均 秋くく小 咲ぬとる 吐 風
 盃も花一くんの菊 足 二の那 色 波
 弱は外すくなきく記そ菊の宴 鯉 燦
 白きものきろくふ何り作已菊 千 外

酒ふくめ葉はく山乃 川の裾 何 来

皇陽

夕宗成て菊 伴ふとおもひ 危 二 水
 八手菊やくふ九日とわくきくぬる 蒼 孤
 老くくやくふ乃と初心葉のほ 誰 絲
 きくも海や一くんの片くの雛此 歌 木 丹
 昨日雨降るは
 ひとしつ盃 恙せむくふ 乃 菊 蒼 孤
 子とくくくくくくく
 望きくく 傍 既 足 ても 菊 足 くと 雲 方 山

年既京栗おちろく威危蚊足

何来も勝正とつと思ふ心の事ほくは

まける乃もくもするものや兼人なせ心社

函贊

移ひあ勢の襟毛やこれ菊素竹

栗どど

志栗の為て花なり石佛若有

迷栗や吐き捨へと笑ひりけ益秋
いっ栗や憎くくも笑顔をし雲風
為栗やま出ふ家の胡ちけま芝

紅葉

福毒の夢はけりり初紅葉茶狐
さる福ふ年家の幸れもちか楼川
晩清の掛りぬ比やし李趙
うきふりや一入面存の照もみち道橋

あゝもろもろ 淋 了 必 不 勤 何 已 律 富
胡 紅 紫 新 何 事 也 亦 他 淺 一 芦 皓
村 も ち ら 先 本 の う ら せ っ け っ 也 白 亀
濃 も う 地 再 以 茂 る 山 踏 り 乳 貫 太

葛

淋 さ め 上 塗 一 し づ ち 登 此 葛 韋 吹
崩 れ や ち 葛 の 俣 有 垣 根 外 梅 郊
五 子 ち 小 色 亀 葛 の 細 乃 面 々 々 穴 亭

枯尾花

悲 一 う 成 て 入 日 也 枯 尾 花 魚 日
又 ま ち 小 源 の 内 竹 戸 枯 尾 花 蒼 孤

秋日

坂 の 空 富 士 とい ろ く 小 び ち り 危 卜 尺
上 中 くと 下 身 ち 毛 ち 秋 の 定 元 兆

うき人と又口説又む秋の言
 去某
 悲ふなりし所振とむあきれくれ
 瑞坡
 新まゝの月を細まゝ言れらるる
 一
 岡崎のうらみあや秋のくま
 一
 青浦や侍黄ふがると秋の言
 一
 朝これ希き哉やとて娘れ言
 凡國
 秋の言肥く男色く
 一
 夕くまをいつもあましも
 秋の海
 涼菫
 秋の言女房の思慮見せけり
 一
 まよふてこゝろと秋の夕アガ
 一
 松^傳下
 氷花

肩癖とねてむむや秋の言
 孟志
 言語く眺さへ見えぬ夕アガ
 蒼孤
 掛ものごとくもまきちや秋の言
 涼傭
 次廣の浦の糸よこの庭や娘れ言
 公曳
 行燈とせほさぬ内を娘のくれ
 蝶夢
 日も入る急月も出た秋の言
 宝馬
 心より外よものなり娘のくれ
 一
 ちつくと物違ふ言秋の言
 木丹
 鞠垣や梅とてても娘のくれ
 佐園
 生葉の葉けとてまじ秋の言
 一
 外

秋の日は花よりもろく菊の清 玉圃
惜るる一奴もまろく也 梅の香 百桂
暮る日の晴るも淋し秋の空 色我
流ひとるとも花おもひける秋の香 法涼
暖心兼て 却も秋の夕アガ 伴富

西行

秋をけ法師の夕アうれ 梅霜

自西渡

あらしむけ我も淋しき 梅の香 芭蕉

病後

角力とる心ふりくぬ秋の香 尚白

母の才まるとくろか

秋子やむととと飯ふ 秋の香

秋夜

くろくろびる唐茶も秋の味は 梅霜
秋の夜と赤いしとと吐しうか 芭蕉
とき表と花氣を移らして旅床か 鬼貫
初夜と口つらくも秋の香に危 来山

秋ひとと琴柱をひきてあねお分
 ち川とてあはれぬ樹の別き分
 秋の夜やゆきゆく人の 膝 一 胡 及
 物う夜やあくと板戸のせうくき 岩 翁
 芭蕉柴のせうくあをき月あが 芦 皓
 秋の夜やあはれとやあせぬ我うろ 平 砂
 風をうや月あつ子のきき言 玉 圃
 簀織のいとちた夜や女 業 百 桂
 雨をうや尾花月あはれ薄明己 其 礼
 秋の夜やあはれとやあせぬ我うろ 田 機

待恋

犬啼ハも其かや園の月 様川

夜寒

入麩の下禁付るあをき
 行燈の火の遠くあをき
 床言ふそ侍のあをき
 ち風もあをきを系文や犬の夢
 井干の味もあをきを

芭 莖
 梁 山
 梅 郊
 春 郊
 玉 圃

雨中吟
川面小輝ふ声は萩を
け 仙化

秋雨

音るハ尾花のものを
初 初 七角
楚こふ何こもの絨枕か秋の
雨 貞山
むら雨やいつも降れども秋の
衣 羅人
あゝくし何系ハ秋の日
窓りる 古 社 徳
相の葉は耳ふや秋の
雨の音 一 巴

露時雨

根の葉小盛らまして
白雲竹あり 南 羅
菊の香の物小ほく
白雲くハ 希 因

混合

軍場を嵐小追ふ川
空 菊 系 季 吟
あふまきし人も
人子 清くハ 暖 誠 の
結 京 梅 盛

せせ泊や角お髪の上子歌
 草の茶や小雨小神とかき合せ
 さしけ飯妹ら垣根を荒く一危心
 二百十日一日ちふろろあは
 父系や秋も麻小のせしは
 蕨のゆきかきれハ控ふし
 木樨の花の香強しあ上は
 太刀魚や水もたまらぬるる
 月道もかると雪や秋ゆく花の中
 玉き續く海の接唇ハ轡雲
 北平 春郊 凍節 由 七 里 抹 市 考

唐拒や田舎とて茶も
 淋しさや夕よ出てもかき瓜
 月神も月の出ぬうられ初め
 月影の田ふまをく也落し
 推の實や十日くれ雨れ
 きりつるとと茎うらぬと風仙
 喜よ啼やかきくも水のあは
 久しきに形の栞よや秋茹
 料理場の父菜や今をく
 青梨や花の帯くも雨れ
 味 隼 伯 幹 富
 北平 花城 素盈 孤舟 左 簾 把 菊 存 義 万 万 伯 幹 富

大伴西鬼の三弦

さまとも冷し虎と猫の皮羅人

秋 雜

飢し厚の命と拾ふ為種が去札
露ふ虫よ月く花野の乞食が蒼狐
おもひ合ふ作らじ加減や酒と菊心種
萩ふるる今とや月の花急公曳
弦ふせハ野ハ花はよ秋の虹平砂

北國杉柳の比都ふも栗禰とつふもの侍うと
三士のとひひるふ

都も雲の栗田やひえの秋交考

猿西賛

猿ととりま玉母の園小盗とて旧室

悼

ちろこふす葉も暮れ菊の姿雀舟

牡丹餅

萩々花昔な粉の方や女帝を百菴

暮秋

行秋のよと廣げたる粟のいっ 芭芭
ゆい秋の道くさるに紅葉りを 乙由
秋もいやはるをまさうのきりくは 心社
くふのこの秋とむくをに淋し 心社
弓のま行秋の足おくる峯の麻 柳き
ふ言りはしく九月三十日か 鶯口
行路の六根白き 糸の川 花跡
蟻塚の芥も朽るむ 九月 丸室

行路の山際くくく父アうか 宝馬
鴨川のあ一筋くゆくマ 秋 津富
行秋の烟に終り かつと 電 花跡
淋しさも今又各残 言の秋 松架
何とて川 ぬぬ日和戸言の娘 漁光
古ひくく松の青きも言の娘 行病
春長と朝昼とく色く此の秋 木丹

誹諧古今句鑑 秋之部終

附録

秋之部

一陽井素外

今初秋の立伸て危州乃蔓
初ものよ桐の落葉此きき
もつ秋とてら月夜や三の
足初ハ知月の比よ阿よの川
系ふるもの夜明乃張河
親あれと河も娘来早の哉

川越を禪子向よ是出
速火や客ハまろ一教法師
美徳や流る流る孫の詩
靈祭妻の忍癡も何せて
やち火不流るさり危多の月
只なね踊くの父まくれ
秋もまこ流き言やむ行
岸や岸起る我子ハ眼
あさる月の初ハ枯をさくはる危

蘭のむきよく人よ白ひく
康よさそ旭や蘭の新法
ぬきとてはまも情まう
強うぬおちうらや凡の
秋のまてうううなれ
ふと傳ふもま道う
虫指の箱提行の秋
まきりくは啼や下終の
写神のあうう中ふか
法ともふかうと肥せ
箱のあ

白髪や並てまうり
やもり失いかこそ
笑小苑よ昨夜生け
春平の世れ後形や
豚角力汗は一人
日ま入て奇藤を
川まらや底よも
ともいふもまう
厚啼や淀の
里まくあゆみ

啼麻の敷きく宿小兩戸を
淋さのかさろそ見ゆ月麻
白雪れ波吹ら手るみ分が
朝露の合解す物も花ゆら
花野をきて叶る月の小川が
一とろそせぬや凡象の脚
心とろそ居や芭蕉ハ破き星明王
きとろそみとて高し花とろそ
風重今路ふたし記とれ居
後形の上戸にる危様ぬとる

麻
牛

日毛西ふ悉くきろを月と居
月尺るや際と心の夜れ友
名月や今宵楚入あすの川
居らるを悉きかろとろふの月
名月やよふれ流る清乃芭
月の花や流る戲まの犬一眉
幾小夢されととせりる存の月
人喜の喜の文つきやうふ
葉ハ只古き花さく山路が
笑満て荒く一はよひと菊

横小足る菊はかきつや八日月
あさうし黒さ高れて葉かさね
群川の菊を静うふるれ危
うく根ハ張ふさくや死くれを
大吼る叶寺いままさうと紅葉
極ぬるそ峰のもう葉か
渚の足小送らつめか子紅葉が
眼と秋とほつる涙の夕ア外
席れハ人子起され危秋のうれ
何もさ故こそれゆき言の秋

秋
辛

花の秋ちる花三十日れ月夜

又月な久信花の入りこられて

三幸と母の文もおどりせ方夫

むうひ火や庭へぬ玉の母を千世

家刀自々母を糸れ

新もややまた在せ一人と客

心これきる人の才ゆりされか

さめて月やてもけ世を憂うら

雨後

月ハ水雲の傍小足る夜うか

浪士と宿ふかあを

葉いろくけりし心まきりし

田家

きりくせ猶枝らうふをの菊

函のし飛せし

長き初や寝てまきならちりて

万句與初の花子へ

番船や一舟万人とむふれ日

時流秋之郭終

